OSAKA MUSEUMS

vol.11 TAKE FREE

特集

ここの場所ができるまで。

大阪市内
6ミュージアムの
スケジュール&トピックス
12月—2月
2019-2020

大阪市立科学館プラネタリウム「カールツアイスⅡ型25号機」
（大阪市指定有形文化財）

文化庁

平成31年度 文化庁 地域の博物館を中核としたクラスター形成事業

OSAKA MUSEUMS SCHEDULE & TOPICS 12月–2月

※全額表記のない展示などは、常設展示観覧料でご覧いただけます。
※すべての施設は、中学生以下・大阪市在住の65歳以上の方（一部、特別展を除く）、障がい者手帳等をお持ちの方は無料です。
※団体割引などがある場合があります。詳細は各施設にお問い合わせください。

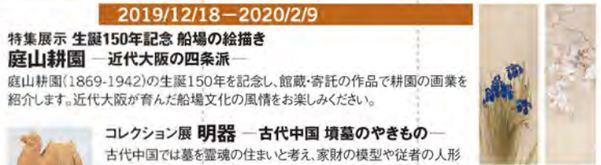
12月　1月　2月

大阪市立美術館

開館時間／9:30AM～5:00PM
※入館は閉館の30分前まで
休館日／月曜（祝日・休日の場合はその翌平日）、
展示替期間（12/9～12/17）、
年末年始（12/28～1/4）
コレクション展・特集展示観覧料／一般300円、
高校生・大学生200円
https://www.osaka-art-museum.jp

2019/12/18—2020/2/9

特集展示 生誕150年記念 船場の絵描き
庭山耕園 —近代大阪の四条派—
庭山耕園（1869-1942）の生誕150年を記念し、館蔵・寄託の作品で耕園の画業を紹介します。近代大阪が育んだ船場文化の風情をお楽しみください。



（左）庭山耕園〈雨中燕子花図〉
近代　大阪市立美術館蔵
（庭山慶一郎氏寄贈）
（右）庭山耕園〈八重桜五雀図〉
大正14年（1925）
大阪市立美術館蔵
（庭山慶一郎氏寄贈）

《加彩 駱駝》
北魏・6世紀
大阪市立美術館蔵

コレクション展 **明器 —古代中国 墳墓のやきもの—**
古代中国では墓を霊魂の住まいと考え、家財の模型や従者の人形などが副葬されました。本展ではこれらやきものの明器を紹介します。

コレクション展 **没後50年 鍋井克之**
鍋井克之（1888-1969）は小出楢重らとともに活躍した大阪出身の洋画家。風景画の代表作や関係資料など館蔵品でその画業を振り返ります。

大阪市天王寺区茶臼山町1-82
（天王寺公園内）
tel. 06-6771-4874

大阪市立自然史博物館

開館時間／9:30AM～5:00PM
（11月～2月は4:30PMまで）
※入館は閉館の30分前まで
休館日／月曜（祝日・休日の場合はその翌平日）、
年末年始（12/28～1/4）
常設展示観覧料／大人300円
高校生・大学生200円
http://www.mus-nh.city.osaka.jp/

2019/12/14—2020/1/26

テーマ展示
自由研究・標本展
「ジュニア自由研究・標本ギャラリー」
小・中学生、高校生のみなさんの作った標本や自由研究を展示します。それぞれの展示には専門分野が近い学芸員のコメントも添えています。

1/5—2/2

新春ミニ展示「子年」展
令和2年の干支に関連して、「ネズミ」にまつわる様々な生き物を展示します。

大阪市東住吉区長居公園1-23
tel. 06-6697-6221

大阪市立東洋陶磁美術館

開館時間／9:30AM～5:00PM
※入館は閉館の30分前まで
休館日／月曜（祝日・休日の場合は翌平日）、
展示替期間（12/9～12/20）、
年末年始（12/28～1/4）
右記の料金で常設展を含め、
館内の展示すべてをご覧いただけます。
http://www.mcco.or.jp/

2019/12/21—2020/4/12

特別展
「竹工芸名品展：ニューヨークのアビー・コレクション
—メトロポリタン美術館所蔵」
アビー・コレクションの竹工芸75件を形や主題が関連する当館館蔵品とあわせて展示するとともに、四代田辺竹雲斎氏による竹のインスタレーションを制作します。
料金：一般1,200円、高校生・大学生700円

三代田辺竹雲斎〈未来への歓喜〉
2008年
The Abbey Collection, "Promised Gift of Diane and Arthur Abbey to The Metropolitan Museum of Art." Image © The Metropolitan Museum of Art.

2019/12/21—2020/4/12

特集展 **「受贈記念　木村盛康・天目のきらめき」**
木村盛康「松樹天目茶盌」
2005年
写真：今村裕司

大阪市北区中之島1-1-26
tel. 06-6223-0055

大阪市立科学館

開館時間／9:30AM～5:00PM
※展示場入場は4:30PMまで
※プラネタリウム最終投影は4:00PMから
休館日／月曜（休日の場合はその翌平日）
年末年始（12/28～1/4）、3/2～3/4
展示場観覧料／大人400円
高校生・大学生300円
プラネタリウム観覧料／大人600円
高校生・大学生450円
3歳以上中学生以下300円
http://www.sci-museum.jp/

2019/12/6—2020/3/1

プラネタリウム **夜空の宝石箱「すばる」**
冬の夜空に小さくきらめく星の集まり「すばる」。昔から人々に親しまれてきた、この天体の魅力に迫ります。

プラネタリウム **オーロラ**
世界で一番美しい自然現象と言われる天空の光、『オーロラ』。そのふしぎな光の正体に迫ってみましょう。

写真／倉敷科学センター

写真／中垣哲也

第5恩物のレプリカ

ミニ企画展
積み木のルーツ～フレーベル「恩物」～
2/1—3/1
積み木は幼児教育の祖フレーベルの「恩物（おんぶつ）」が始まりとされます。大正時代の恩物や現代の積み木を紹介します。会場：展示場4階　入場：無料（ただし、展示場観覧料が必要です）　協力：大阪市立愛珠幼稚園

大阪市北区中之島4-2-1
tel. 06-6444-5656

大阪歴史博物館

開館時間／9:30AM～5:00PM
※特別展会期中の金曜日は8:00PMまで
※入館は閉館の30分前まで
休館日／火曜（祝日の場合はその翌日）
年末年始（12/28～1/4）
常設展示観覧料／大人600円
高校生・大学生400円
http://www.mus-his.city.osaka.jp/

1/8—3/2

特集展示 **押絵「西国三十三所観音霊験記」と生人形**
大阪でも人気を博した生人形興行ゆかりの押絵作品（熊本県益城町所蔵）を一堂に公開。

押絵「西国三十三所観音霊験記」
第十一番 上醍醐寺
聖宝僧正（益城町蔵）

2019/10/16—2020/1/6

特集展示
新発見！なにわの考古学2019
平成30年度に大阪市内で行われた発掘調査の最新成果を、出土した数多くの遺物と遺跡の写真パネルなどでご紹介。

顔の装飾がついた須恵器椀
古墳時代中期（5世紀中頃）
旭区高殿7丁目所在遺跡　大阪市文化財協会保管

2/26—4/5

特別展 **猿描き狙仙三兄弟 —鶏の若冲、カエルの奉時も**
江戸時代の大坂で活躍した森狙仙・兄の陽信・周峰とともに、鶏、蛙、鷹、虎など、動物画を得意とした京坂の絵師をご紹介。大人1,000円、高校生・大学生800円

大阪市中央区大手前4-1-32
tel. 06-6946-5728

大阪市立科学館

日本で初めてつくられた、科学を楽しむ博物館。

四ツ橋にあった電気科学館の外観。今見ても斬新だが、当時はよりいっそう目立つ建物だったろう。

大阪市立科学館の前身にあたる大阪市立電気科学館は、昭和12年（1937）3月に四ツ橋に日本初の科学館施設としてオープンした。目玉となったのは、東洋初のプラネタリウムを設置した6階の「天象館」。あの手塚治虫も、小学生の頃に天象館に映し出される星空に夢中になったという逸話も残る。2～5階は、電気に関する原理や技術を説明する実験器具を備えた「電気館」。まだ、日本全国に電気が普及していなかった時代のこと。電気器具を販売する「市電の店」も人気を博したという。

第二次世界大戦中の大阪大空襲で、電気科学館は建物の一部を焼失。一時休館に追い込まれたが、戦後まもなくプラネタリウムの投影を行って市民の心を癒した。戦後の電気館は、常に新しい科学知識に触れられるように、定期的な展示替えを行った。人気が高かったのは、歩いたりジャンケンしたりするロボット「スターくん」や「ライトくん」。そして、家電製品などがひとりでに動く「透明人間の部屋」も子どもたちを夢中にさせた。

平成元年（1989）5月31日、建物の老朽化などもあり電気科学館は閉館。中之島の大阪大学理学部跡地に移転し、大阪市立科学館として新たな一歩を踏み出した。地下1階には、世界最大級・直径26・5mのプラネタリウムドーム、1～4階には「宇宙とエネルギー」をテーマとした展示場がつくられた。ところが、科学の進歩はあまりにも速く、わずか3年目には一部の展示内容の情報は古くなってしまった。この反省から、科学館は参加体験型の展示を増やし、来館者自らが生の科学現象を体験できる場へと舵を切る。さらにはプラネタリウムの生解説や「サイエンスショー」など、学芸員が直接来館者に向けて科学を語る機会も増やしていった。

2019年10月、30周年を迎えた大阪市立科学館は、プラネタリウムと展示場4階の一部をリニューアル。最新の技術や情報を取り入れながら、科学を楽しむ文化を伝え続けている。

上／電気科学館のプラネタリウムホール。そこで活躍していた投影機「カールツアイスⅡ型」は、現在も大阪市立科学館のプラネタリウムホール前に展示されている（表紙写真）。
下／開館当時のサイエンスショーの様子。

進歩する科学の変わらない原理。

最先端を紹介する一方で、変わらない科学の原理を解説する展示にも力を入れてきた。例えば展示場4階にある「回転たまご」。3色に塗り分けた周囲のコイルに電流を流すと、発生した磁界の影響によって真ん中に置かれた銅製のたまごが立ち上がって回転する。「実はこれは電気科学館のオープン当初からある唯一の展示。修理や部品交換を行いながら受け継いでいるものなんです」と学芸員の長谷川能三さん。同じ原理で作動する誘導モーターは、扇風機や洗濯機など身近な家電にも使われているそうだ。「原理の面白さを伝える展示は、科学の世界をより広く楽しむための窓口にもなってくれると思います」。

大阪市立自然史博物館

自然を愛する人々の情熱が博物館の原動力に。

大阪市立天王寺美術館（現大阪市立美術館）の2階廊下に並べられた数台の展示ケース。昭和25年（1950）11月10日、自然史博物館の前身にあたる自然科学博物館は、このような〝間借り〟からスタートを切った。

右／美術館の廊下で展示をしていた頃。左側に展示ケースが並んでいるのが見える。
左／初時代の自然科学博物館で開催された「世界の蝶展」で展示を説明する筒井館長（右端）。

筒井嘉隆館長（作家・筒井康隆氏の父）を含めても職員はわずか3名だったが、その周囲には「博物館を盛り上げよう」という協力者がたくさんいた。筒井館長は、彼らとともに資料の収集に着手。さらに、大学の研究者やハイアマチュアな市民を巻き込んで、遠方での調査活動にも取り組んだ。

例えば昭和28年（1953）には九州南端のトカラ列島で科学調査を行っている。筒井館長らは大学の研究者を中心に独自のチームをつくり、地質・動植物や民俗学、文化人類学などの視点から調査を実施。数十の新種や新亜種を発見するという成果をあげた。マスメディアにも大きく取り上げられ、トカラ列島と自然科学博物館の存在が広く知られるきっかけにもなったという。その2年後には現在の「友の会」の前身にあたる「博物館後援会」も誕生。市民とともに調査・研究を行う礎が築かれた。

旧籾小学校にあった時代にも屋外展示はあった。ナガスクジラの骨格標本に子どもたちも釘付け。

昭和32年（1957）、自然科学博物館は旧籾小学校の校舎へ引っ越し。〝仮住まい〟とはいえ、収集した資料を展示する空間は広がり、本格的な博物館活動が始まった。市民と共同で行う発掘作業や調査活動が盛んになったのもこの頃だ。今の第2展示室にあるマチカネワニの化石は、愛好家の青年が持ち込んだ骨片がきっかけで発見されている。こうした積み重ねのなかで、現在の「市民とともにある博物館」という姿が見出されていった。

昭和49年（1974）4月、長居公園内にようやく施設がつくられ、大阪市立自然史博物館がオープン。人間そのものが自然の進化の中で生まれ、人間の生活は自然と深く結びついている。自然史という言葉には「自然と人間の関わり」には長い歴史の積み重ねがあるという意味が込められている。

昭和49年（1974）、自然史博物館の開館記念式典でナウマンゾウの復元模型を前に語る大島靖市長と千地万造館長（いずれも当時）。

全国に先駆けた「友の会」モデル。

博物館後援会の活動は、大阪自然科学研究会を経て大阪市立自然史博物館友の会に引き継がれた。現在、友の会を運営する認定NPO法人大阪自然史センターの理事長・梅原徹さんは、小学校3年生の時に研究会に参加。友の会にも30年以上関わっている。「従来の研究会活動に比べて、友の会は広く一般市民に親しまれるものへと性格を変えました」。現在の会員数は約1,600世帯。友の会を中心に博物館の普及活動を組み立てるという方法は、全国の自然史系博物館のモデルになっている。友の会では、ハイキングや合宿のほか、特別展のための調査活動をすることも。博物館をもっとアクティブに楽しみたいなら、ぜひ一度友の会の活動に参加してみてほしい。

大阪歴史博物館

準備期間はわずか7ヵ月、収蔵品ゼロから始まった。

大阪歴史博物館の前史は、昭和6年（1931）、大阪城天守閣横に竣工した旧陸軍第四師団司令部庁舎から始まる。GHQや警察の庁舎に使用されたこの建物は、戦後に大阪市の管理下に戻され、大阪の歴史や郷土資料を展示する市立博物館がつくられることになった。

開館までのスケジュールは急ピッチだった。創設事務室が設けられたのは昭和35年（1960）5月1日、開館日は7ヵ月後の12月1日。準備期間が短すぎるうえに、この時点では学芸員も展示資料もゼロ。8月15日に採用された学芸員5名は、大阪城天守閣の切符売り場の一角を借りて開館準備に奔走することになった。

まず着手したのは建物の改修だ。さすがは元軍事施設、頑丈すぎて壁ひとつ壊すにも工事関係者を閉口させた。ひとまず1階展示室と地下収蔵庫のみを整えたが、同時に企画展の準備も進めなければならない。学芸員たちは分野を超えて力を合わせ、他館やコレクターの所蔵品に頼り、展示をつくりあげていった。昭和37年（1962）に2・3階の改修を終え、全館オープンを果たした。

年間5〜6回の企画展と並行して、学芸員による調査研究も盛んに行われた。市民の協力も得ながら、近畿を中心に日本各地の文化財調査も実施。地域の歴史・文化をテーマとする博物館として、全国に先駆ける存在として知られるようになっていく。昭和55年（1980）、常設できる資料が増えてきたことから歴史展示を再構成。1階は古代から中世、2階は「天下の台所」をテーマとする展示に改編した。

そして平成13年（2001）、大阪市立博物館は閉館し、「大阪市立新博物館」と「考古資料センター」双方の機能を併せ持つ大阪歴史博物館として開館した。新たな博物館は大阪城公園の南西、難波宮跡と大阪城を望む位置にある。ゼロだった収蔵品は7万点にまで増えていた。大きな比重を占めていたのは市民からの寄贈品。そのすべては、寄贈者の思いとともに大阪歴史博物館へと受け継がれている。

昭和44年（1969）に展示された月の石。

考古部門の館蔵品第1号として登録された「袈裟襷（けさだすき）文銅鐸」（伝兵庫県出土・弥生時代中期）。開館時にも展示され、記念すべき大阪市立博物館報第1号の巻頭を飾った。

旧陸軍司令部庁舎を利用した大阪市立博物館。昭和58年（1983）秋の「桃山・江戸時代の町人文化」展は大人気を博し、この写真が撮影された日には13,000人もの入館者があった。

博物館の収蔵品はどこから来る?

「柴光 初代中村鴈治郎似顔絵」（今中富之助氏寄贈）

収蔵品ゼロから7万点に。一体どのように資料の収集を進めてきたのだろうか？　大阪歴史博物館学芸員の澤井浩一さんは「展覧会の資料をお借りする際にできた人間関係から、貴重なコレクションの寄託または購入につながることもありました」と話す。また、学芸員自身が調査や研究を通じて出会うコレクターとの関係が、資料の購入や寄贈のきっかけになることも。例えば初代中村鴈治郎関係資料を集めた「今中コレクション」は、昭和38年（1963）に和菓子の老舗「鶴屋八幡」の主人・今中富之助氏から寄贈されたものだ。「今中さんは初代中村鴈治郎の贔屓であると同時に、町人学者的なところもありました」と澤井さん。大阪歴史博物館には大阪の好事家たちの愛のこもった品々も収蔵されているのだ。

大阪市立東洋陶磁美術館

珠玉のコレクションを守り、伝える。

世界でも珠しい陶磁器の専門美術館が、大阪・中之島に開館したのは昭和57年（1982）。大阪市が住友グループから寄贈された「安宅（あたか）コレクション」を柱として設立した。このコレクションは、総合商社・安宅産業の会長だった安宅英一氏が、同社の文化事業として収集した韓国陶磁・中国陶磁を中心とする珠玉の作品群。安宅氏は「その分野において比類ない第一級品であること」「傷のあるなしにかかわらず品格の高いもの」を選択基準において、一つひとつの美術品を購入していたという。

平成11年（1999）に新館を増築した際の写真。当時の中之島の様子がよくわかる。

開館当初からロビーに設置されている三国時代の鴨形土器。館の歴史をそっと見守っている。

寄贈された約1000点には、「油滴天目茶碗」「飛青磁花生」という国宝2点も含まれていた。安宅産業がそのコレクションを手放すことになったのは、昭和54年（1979）にオイルショックの影響を受けて経営危機に陥ったためだ。すでに高評価を受けていたコレクションの散逸を惜しむ声は各方面から上がり、国会でも論議されたほどだった。

美術館の開館後には、実業家・李秉昌（イ・ビョンチャン）氏による韓国陶磁、入江正信氏による中国陶磁のコレクションなどの寄贈が相次ぎ、質量ともに世界的な陶磁美術のコレクションを有する美術館としての地位を築いた。

東洋陶磁美術館が建つのは、明治・大正時代には煉瓦づくりの大阪ホテルや大阪銀行集会所があった場所。陶磁器の美術館らしく、素焼きタイル貼りの落ち着いた外観は、昔からずっと中之島にあるようなたたずまいを魅せている。

祝40周年！大阪市文化財協会の歩み

「宮殿、古墳群、城下町。三つの遺跡に鍛えられました」

古代から都市を営んできた大阪の地面には、その歴史を証明するさまざまな遺跡が眠っている。大阪市文化財協会は、大阪市内の文化財の調査・保存と活用を推進するために、難波宮址顕彰会と長原遺跡調査会を主な母体として発足した。

「7〜8世紀の宮殿遺跡・難波宮と、低地帯の沖積地である4〜6世紀の古墳群・長原遺跡。時代も性質もまったく異なる遺跡を調査してきたメンバーが合流したことが、当協会をユニークな組織にしました」と学芸員の南秀雄さん。さらに、地質学や建築史学、古代史学など、分野の異なる専門家を交えて発掘調査を進めるという、当時としては先進的な組織づくりも試みてきた。

バブル期に入ると、市中心部のビルや商業施設の開発が盛んになり、それに伴って発掘調査も急増した。「大阪の街なかには近世の遺跡はもう残っていないと考えられていました。ところが地下2〜3mにきちんと残っていて、成果が上がりはじめたんです」。豊臣秀吉・秀頼時代の大坂城の城下町の姿が浮かびあがってきたのもこの頃だ。

難波宮、長原遺跡、大坂城と城下町、時代も性格も異なる遺跡に対応する中で調査技法は切磋琢磨され、同協会は全国の遺跡調査の先駆的な存在に。それでも「難波宮だけでも全容解明には少なくとも100年はかかりますよ」と南さん。もし新しいビルの開発現場を見かけたらそっと覗いてみてほしい。地面から歴史を読み解いていく人々の背中が見えるかもしれない。

「図面をつなぎ合わせ、1500年前の建築技術者と同じレベルの操作をしながら、遺構の状況を把握していったんです」と南さん。

発掘によって見つかった豊臣時代の大坂城の石垣。この発見が研究を大きく押し進めた。

南さんたちが発掘調査を行った5世紀の倉庫群（16棟）。当時としては考えられない規模に世間はあっと驚いた。

お仕事図鑑

大阪中之島美術館

「大阪と世界の近代、現代美術」をテーマにした美術館で、2021年度の開館を予定しており、現在、中之島4丁目において建設工事が進んでいる。コレクションは約5700点を数える。本誌では2名の学芸員を紹介します。

「貴重な資料が、次世代へと受け継がれていくために」

アーキビスト　松山ひとみさん

アーキビストは、文書記録などの一次資料を出所や由来に沿って管理し、利用者が必要な情報を探し出せるよう整理します。美術館の収蔵するさまざまな美術関連資料も学芸員のものではなく、人類共有の財産です。たとえ展示される機会が少なくても、誰かがその資料を見出すことで、新たな価値が生まれるかもしれません。10年後、50年後の人々に向けて、これが何であるのかわかるように伝えていくことは、文化資源を所有する美術館の使命の一つです。

中でも私は視聴覚メディアのアーカイビングを専門としています。映像や音声を収録するメディアは、フォーマットなどの技術が廃れると再生が困難になります。そのため、それらを再生する機器や技術をあわせて保存したり、そのメディアの歴史性ごと後世に残すようなコンテンツのマイグレーションをしたりする必要があるのです。

私が着任するきっかけとなったのは、大阪中之島美術館が具体美術協会の資料群の公開を決めたことでした。手紙やメモ、写真や映像フィルムなどが混在した大量の資料を活用可能にするためには、展覧会開催を目指すのとは別の整理方法が必要です。開館までの目標は、収蔵資料の存在を外から見えるようにすること。幅広い調査研究に対応できるような仕事に励んでいます。

「関西には、商業にまつわるデザインの豊かな土壌があります」

デザイン担当　北廣麻貴（きたひろ）さん

今年の4月に大阪中之島美術館準備室に着任しました。

私はもともと社会学が専門で、新聞というメディアと都市の関わりについて研究してきました。同時に、戦前のポスターやパンフレットの研究もしてきており、それが現在の仕事につながっています。広告はデザインや色使いから作成当時の流行や社会背景を推し量ることができるのです。一方で、そうした広告類に見られる絵画やグラフィックは、美術史的な観点からも研究対象となり得ます。大阪中之島美術館の収蔵品にもそうしたポスター類はたくさんありますが、ポスターに留まらず商品パッケージや包装紙などのデザインにも多様な表現が用いられてきました。そうした広告印刷物を紹介する『プレスアルト』という雑誌が発行されるなど、関西には産業や商業にまつわるデザインの豊かな土壌があります。

社会学で培った俯瞰的な視点を活かし、1枚1枚のポスターを分析するだけでなく、同時代のものや同じ商品のものを並べることで、新たな見方を提示できるような展覧会を企画できるようになりたいと思っています。ポスターの魅力の一つは気軽に楽しめるところ。それを美術館へ足を運ぶきっかけにしてもらいたいです。

ミュージアム用語集 その7

【温湿度計】

大阪歴史博物館の学芸員　松本百合子さんに聞きました。

文化財の展示や保管にとって、注意を払うことの一つに温湿度管理があります。ほとんどの文化財は、湿度が上がるとカビが生えたり錆びたり、湿度が下がると乾燥して縮んだりします。また、紙や金属など材質によって保存に適した環境が異なり、ミュージアムでは常に温湿度に気を配っています。そのために欠かせないのが温湿度計です。

デジタル式の温湿度計（上）は、小さなデジタル時計形の機器に温湿度が表示され、パソコンに取り込んでデータを管理できる便利なものです。近年は無線式も普及し、よりすばやく温湿度を把握できるようになりました。

アナログ式（下）は毛髪などが空気中の温湿度変化で伸縮することを感知し、四角い透明ケースの中で回転する紙の筒にインクでグラフが記録されます。計測方法は原始的で紙の取り換えが面倒なのですが、展示ケース内の継続的な環境変化がその場で見える利点があります。今も根強くアナログ式の温湿度計を使うミュージアムが多いのもうなずけます。

リレーエッセイ

MUSEUMS TRIBUNE

第7回

桂南光さん（談）

illustration: Kyoko Yamakuni

大阪市立美術館には高校（府立今宮工業高／現今宮工科高）の美術部に入って以来、ずっと通っています。

通学は富田林から大阪阿部野橋まで近鉄。天王寺で環状線に乗り換えたら新今宮までひと駅だけど、家を出た時点で遅刻確定ということがしばしば。遅刻届に家の判子をついて出すのが面倒で、天王寺駅で会った友達と「休もか～」と言って、美術館の隣の慶沢園で本を読んだり昼寝したり。僕らが頻繁に通うので、受付のおじさんが「またキミらか!?　今日は（入園料は）ええわ」とタダで入れてくれたことも何度かありました。のんびりした時代です。

美術部に入ったのは、子どもの頃から絵が好きでマンガ家になりたかったから。同じマンガ家志望の友達の中には、美術館の中にある「美術研究所」に入ってデッサンを本格的に学ぼうかという人間もいました。クラブは私ら1年（3人）と3年だけで、2年生がいない。それで2年に上がったら好き放題です。美術館地下の「マロニエ社」に油絵の具を買いに行かされていたのが、2年からは立場が逆になり、下級生に買いに行かせた絵の具を好きなだけ使って好きな絵を描いていました。

高校の頃から産経新聞に一コママンガを投稿していたし、同世代の人間の集まりに行っても「絶対、俺の方が上手やな」と思っていた。ところが3年になるとスゴい人間がたくさんいて、「こらアカンな」とマンガ家は諦めました。でも、就職するのもイヤだった。そんな時、ラジオで喋っていた師匠（桂枝雀／当時は小米）の声を聴いて、「とりあえずこの人が良さそうやから」と会ったこともないし噺家になる気もなかったのに「弟子にしてください」と行って、今日に至っています。噺家になってからも『ぽむ』というマンガ同人誌や雑誌『プレイガイドジャーナル』にもイラストを描いたりしていましたね。

いつでも安らぎを与えてくれる場所。

あれだけ通ったのに、高校の頃は感動したという記憶がなく、卒業してから観た絵の方が印象深いですね。最近では今年開催されたフェルメールや、アメリカの女性浮世絵コレクター（メアリー・エインズワース）の特別展とか。もう80年以上前の建物なのに、出展作品によって照明の色から会場のレイアウトからガラリと変わるのが素晴らしいですね。

でも外観や中は変えてほしくない。僕にとっては慶沢園や茶臼山の池とともにいつでも安らぎを与えてくれる場所だから。後世に残すためにも美術館にもっと予算をかけてほしいと思います。以前、ここで開かれた落語会に出演したのも思い出深いですね。

今やあの大英博物館が日本マンガの特別展を開くぐらいだから、大阪市立美術館ではぜひ「大阪のマンガ大展覧会」をやってほしいと思います。大阪からはマンガの手塚治虫だけでなく、劇画でも辰巳ヨシヒロや佐藤まさあきなど数々の才能が生まれているし。プロデューサーもやらせていただきますよ。

かつら・なんこう　1951年大阪府南河内郡千早赤阪村生まれ。府立今宮工業高校美術部時代からルネ・マグリットに憧れていた。1970年に桂枝雀（当時は小米）に弟子入り、べかこを名乗る。1993年に三代目桂南光を襲名。1994年、上方お笑い大賞受賞。2015年、大阪市市民表彰。MBS「ちちんぷいぷい」の名物コーナー「南光さんと美術館に行こ」は10年以上続いている。

OSAKA MUSEUMS vol.12
2020年3月発行予定

「OSAKA MUSEUMS」では、大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪市立科学館、大阪歴史博物館、大阪中之島美術館、大阪市文化財協会を中心として、大阪市の博物館・美術館の魅力と情報を紹介しています。

主な設置場所／大阪市内の各種情報センター、交通施設、文教施設、観光事業者、ホテル、複合商業施設、区役所ほか

2019年12月10日発行　発行／地方独立行政法人 大阪市博物館機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32 大阪歴史博物館内　tel.06-6940-4330（代表）
制作／株式会社140B
（デザイン：津村正二、中務慈子　撮影：西岡潔、浜田智則　取材：杉本恭子、立花莉絵子）

ここにしかありません。

中之島アートウォール

中之島三井ビルディング（大阪市北区中之島3-3-3）の4階に新しくオープンした食堂フロア［CUIMOTTE NAKANOSHIMA］の通路壁面に、大阪中之島美術館（P6）の収蔵作品がパネルで展示されている。モディリアーニや佐伯祐三など、美術館の代表作品が解説付きで勢揃い。食堂の利用者なら自由に見学できるので、ミュージアム見学がてら、食事やお茶のついでに観に行こう。

●営業時間8:00AM～9:00PM　土・日・祝休